

適正着果で高品質りんご生産

徹底した栽培管理を

当JAを代表するブランドりんご「飛馬ふじ」の品質向上を目指すと7月17日、飛馬ふじ栽培研修会が行われ、飛馬ふじ生産者が23名が参加した。

始めに農業振興課の米澤主任は「近年糖度が低下してきていることから、品質向上に向けてのポイントなどを再確認して頂きたい。」と話した。

令和元年産で見ると、ワイ化栽培で40玉の比率が多かったことから、根域の狭いワイ化栽培が干ばつの影響を大きく受けたと推測されている。「今年度は適度に降雨がある為これらの影響は少ないと考えられるが、干ばつ気味の場合にはかん水などの対策を取っていくとよい。」とした。

飛馬ふじは糖度14度で、着色度合いが特A色以上という基準があ

る為、それらをクリアする為にも重要なポイントをいくつか紹介していきたい。

まず、摘果の強さにおいて3頂芽1果と4頂芽に1果を比較すると、果重、糖度に差が出ることが下表から分かる。

わずか0.2度の差であるが、この



多くの生産者が足を運んだ

摘果と果実品質の関係

(りんご試験場：
当時昭和61年データ資料より)

	翌年の花芽率 (%)	果重 (g)	糖度
3頂芽に1果	41%	251g	14.3度
4頂芽に1果	55%	285g	14.5度



0.2度で糖度14度の基準をクリアできるかどうかを考えると、適正着果にすることは重要な作業であることが分かる。

また、適正着果にすると次の年の花芽形成にもいい影響を及ぼすことから、摘果と高品質生産は深い結びつきがあると言えます。



簡単な枝整理と葉取作業で良い着色をすることが出来る



全体的に枝と葉が多く着色していないことが分かる



日光を内側まで通してあげよう

樹勢の強い樹でも、着色管理をしなければならぬ。
 下の写真①と②は同じ日に撮影されたこまちふじである。
 写真①の樹は強樹勢の徒長枝が繁茂し、葉も多い状況であり、着色しにくい為、徒長枝の整理、必要以上な葉取作業をしなければならぬ。
 写真②は適正な樹勢であることから、簡単な徒長枝の整理と葉取作業で玉回しを行う事で十分な着色を行うことが出来る。
 よって適正な樹勢を保つことにより、枝の整理と葉取作業の労働力を軽減することも出来る。

高品質りんご生産の栽培管理

飛馬ふじの生みの親、田澤俊明さんが講師を務め、実すぐりを実際にやって頂いた。

田澤さんは、大玉生産をするため、素早い摘果作業と中心果を残すことを徹底するよつ呼び掛けていた。

また、果そう葉が無い場合、糖度や肥大の生育が遅くなる為、摘果してもらいたいと言っていた。

全体的に田澤さんも樹の内部までしっかりと日光を通していくような管理が重要だと言っていた。

最後まで皆さんで高品質りんごを収穫できるよう、丁寧な栽培をし、飛馬ブランドを更に向上させていきたいと思います、生産者一同意気込んでいた。

参加した生産者らは、摘果作業中疑問に思っていた事や、これらの作業について質問し、理解を深めていた。

飛馬ふじの認知度も年々高まっております、販売を楽しみしている消費者が増えています。

今後は、これまで紹介した栽培を意識しながら、糖度や着色の向上を目指して頑張りましょう。